

発行：小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室

〒923-0801 石川県小松市園町ホ 62 番地

TEL0761-24-8132 FAX0761-20-1194

http://www.city.komatsu.lg.jp/kakuka/maibun/ka_top.asp

メールアドレス:maibun@city.komatsu.lg.jp

平安時代の須恵器窯2基を発見！



1

ふた なしめおがしいやま

ニツ梨豆岡向山古窯跡群

小松市ニツ梨町

平成20年度の調査では、9世紀後半～末にかけて操業された6号窯（写真右）と10世紀前半の5号窯（写真左）の2基の須恵器窯や、灰や失敗品を捨てた灰原が見つかっています。

両窯とも、燃料の薪を燃やす部分が、従来の窯とは異なり、土坑状となっています。このような燃焼部の構造は、南加賀窯跡群と美濃須恵窯跡群（岐阜県各務原市）の窯跡のみにみられる特異なものです。



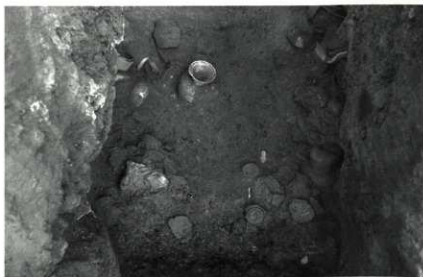
豆岡向山と発掘調査された窯跡の位置

ニツ梨豆岡向山古窯跡群はその一支群で、東西南北全ての斜面に窯が築かれており、これまでに 10 基を発掘調査しています。本年度調査の 5・6 号窯は、5 号窯が 10 世紀前半、6 号窯が 9 世紀後半から末に操業されたもので、須恵器生産終末期の窯であります。両窯とも煙を出す部分は既に失われていましたが、薪を焼く部分から製品を焼く部分にかけての天井が完全に残るなど、残存状態が非常に良好でした。この時期の窯は、製品を焼く部分の床が 40° 前後の急傾斜となっています。これは、窯体内の温度上昇を早くして、製品を焼く時間を短縮するための工夫と考えられます。500 年間も作り続けた結果、薪が少なくなり、コスト削減が大きな命題であったのでしょう。現代のエネルギー問題をみるようであり、非常に興味深いものです。

◆何が焼かれたのか？

窯では、須恵器という灰色の硬質な焼物が生産されました。須恵器生産技術は、4 世紀末に朝鮮半島から渡って来た技術者によってもたらされた先進技術で、ロクロを使用し、土器の大量生産が可能となりました。これらの製品は主に南加賀地域内の集落や役所及び寺院などに供給されました。

今回調査した、5・6 号窯では、
 碗・わん 杯・はい 盤などの食器や、甕・かみ 甕
 及び両側に耳のついた双耳瓶などの貯蔵具が焼かれていました。過去に調査した同時期の 1A 号窯や 7 号窯は、瓦も焼いた瓦陶兼業窯でしたが、今回の窯場では、まだ瓦は発見されていません。



6号窯内部の様子

◆南加賀窯跡群とは？

小松市林町から加賀市松山町までの低丘陵一帯には、古代の窯場が広がっています。現在、200 基の窯跡が確認されており、未確認のものを含めると 400 基を超えると考えられています。北陸地方で最大規模の窯場であり、「南加賀窯跡群」と総称しています。区域内で場所を変えながら、古墳時代後期から平安時代中期（5 世紀末～10 世紀前半）までの長期にわたり操業されました。窯は全て、斜面をトンネル状にくり抜いて造る穴窯です。



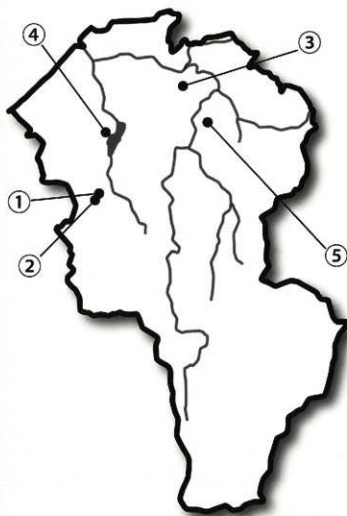
巨大な粘土採掘坑

調査区外へ広がっていることが確認されました。調査区外の部分は、来年度調査する予定であり、さらに深くなることが予想されます。

当窯跡群は、ニツ梨豆岡向山古窯跡群から南側に延びた丘陵南側斜面に位置しています。今回の調査は窯本体ではなく、そこから北東に広がる東側斜面裾部から谷部に分布する粘土採掘坑を対象に行われました。粘土採掘坑とは、付近の窯場で焼かれた土器の原料である粘土を採取した穴のことです。

本年度の調査では、調査区の北端で、9世紀頃の巨大な粘土採掘坑が発見されました。確認部分で深さ約1.6mを測り、

平成 20 年度に調査した遺跡の位置



①ニツ梨豆岡向山古窯跡群

調査面積：487 m²

時代：奈良～平安時代

種別：窯跡

②ニツ梨グミノキバラ古窯跡群

調査面積：690 m²

時代：平安時代

種別：窯跡

③八幡遺跡

調査面積：467 m²

時代：弥生～江戸時代

種別：集落跡・古墳・中世墓・窯跡

④薬師遺跡

調査面積：65 m²

時代：飛鳥～平安時代

種別：集落跡

⑤松谷寺跡

対象面積：約4,000 m²

時代：奈良～平安時代

種別：寺院跡



竪穴住居跡（2号住居）



八幡6号墳の周溝

梯川中流域右岸には、豊かな穀食地帯が広がっています。八幡遺跡は、その平野部に面した低い丘陵上に営まれていました。時期は、弥生時代後期～近世までの長期にわたり、各時代の遺跡が重なり合って見つかっています。

弥生時代後期後半～終末期では、竪穴住居跡が2棟発見されました。特に、円形の2号住居は、直径約10mに復元される大型のもので、7～8本の柱で上屋を支えていました。そ

の柱穴は、建物が歪まないように、柱穴底面がほぼ狂いなく同じ高さに掘られており、当時の建築技術の一端が見えます。

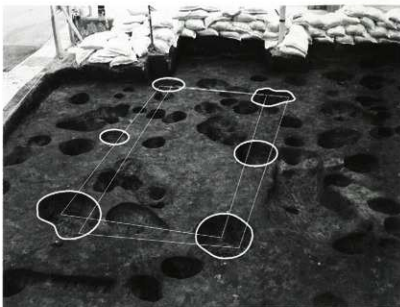
その後、近世の八幡窯での生産が始まるまで、この地に様々な時代のお墓が造られました。前方後円墳である八幡6号墳（古墳時代）にはじまり、室町時代の火葬した人骨を納めたお墓なども見つかっています。



発見された人骨

今回の調査は、昨年度調査でL字型カマドをもつ竪穴住居跡が発見された区域の、南西側近接地で実施されました。L字型カマドは、朝鮮半島からの渡来系移民の住居に設けられたカマドと考えられています。

住宅の駐車場部分のみで非常に狭い範囲の調査でしたが、7世紀前半頃の掘立柱建物1棟が発見されました。建物は、一度建て替えられたようです。昨年度に続き、飛鳥時代を中心とした集落の広がりが確認され、少しずつではありますが、薬師遺跡の様子がわかってきています。



掘立柱建物跡

その① 第25回まいぶん講座「古代山林寺院の展開と松谷寺」

久保 智康氏（京都国立博物館 学芸部 工芸室長）

松谷寺跡で発見された、北陸最古（8世紀前半）の山林寺院跡をめぐって、その実態をさぐるため、まいぶん講座で特集を組みました。

講演で、加賀や越前地域にみられる山林寺院群の様相について学んだあと、講師解説による現地見学会を行いました。現地では、松谷寺の場所が「人里からさほど離れていないが、直接は見えない場所」という山林寺院の立地条件に非常によく合致することが理解されました。ただし、礎石建物については、2間×4間では本尊を安置する場所がとれないことなど、課題も指摘されました。



礎石建物解説の様子

その② 第27回まいぶん講座「北陸の古代寺院と山林寺院」～松谷寺をめぐって～

上原 真人氏（京都大学 大学院文学研究科 教授）



講演の様子

前回の講座を受けて、本講座では視野を全国的な規模に広げて、松谷寺の検証を行いました。

講座では、畿内やその周辺での、布教・法会を行う平地寺院と勉学・修行・法会を行う山林寺院とのネットワーク関係の成立・展開を背景に松谷寺も成立した可能性が高いことが指摘されました。

また、松谷寺に対応した平地寺院が存在した可能性も高く、千代オオキタ遺跡出土の畿内系軒丸瓦がその存在をしめす手掛かりとなる可能性があるとの指摘もあり、今後の調査・研究に大きな視点を与えて下さいました。

5

まつたてら 松谷寺跡

小松市五国寺町

本年度は、礎石建物が発見された区域の北西側にある、もう一つの平坦面を対象に調査を行いました。平坦面の南端部分に基壇状の高まりが同じように存在しており、新たな建物跡の発見が期待されましたが、今回の調査では、礎石建物は確認することはできませんでした。

ただし、その前面にあたる広い平坦地からは、礎石建物が建っていた可能性のある区域が3カ所発見されました。しかし、石の残りが悪かったため、建物跡と確定することはできませんでした。

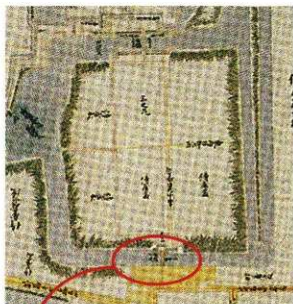


調査の様子（手前の石は礎石か？）

～まげろくの松城跡～

小松城は、寛永17年(1640)に加賀藩三代藩主前田利常の隠居城として、二羽長重時代からの小松城を大増築して造られたお城です。しかし、明治時代初期に廃城となり、取り壊され、今では、本丸の櫓台石垣と堀の石垣の一部が残るのみとなっています。

また、三之丸は、芦城公園に姿を変え、市民の憩いの場として親しまれてきました。今回、その芦城公園南側の改修工事に伴い、試掘・確認調査を行ったところ、絵図通りの位置と寸法で三之丸大手の石垣と三ノ丸橋の石垣が発見されました。残念ながら石垣の最上段と橋の東側が人さく崩れていましたが、それ以外は良好に残っていました。それらは、小松の歴史や文化を物語る貴重な遺産として、埋め戻されて地中に保存されています。



寛文7年の小松城下の絵図(三之丸部分)
(新修小松市史4口絵より)



三之丸大手側石垣と三之丸橋の取り付け部

石垣は、地元の凝灰岩の切石を布積(横目地を通した積み方)したものです。いぶし瓦も1点出土しており、利常在城時代の石垣と考えられます。



おしらせ

平成20年12月より、小松市原町の旧原保育所跡地において、小松市埋蔵文化財センターの建設工事が始まりました。

展示室や研修室などを設け、埋蔵文化財を楽しく学べる施設にしたいと思います。開館は、平成22年4月頃の予定です。



小松市埋蔵文化財センター完成予想図